

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年6月13日現在

機関番号：34504
 研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2009～2011
 課題番号：21520456
 研究課題名（和文） 非人称構文の類型と機能に関する実証的・理論的研究
 研究課題名（英文） An empirical and theoretical study on the typology and functions of impersonal constructions

研究代表者
 小川 暁夫（OGAWA AKIO）
 関西学院大学・文学部・教授
 研究者番号：00204066

研究成果の概要（和文）：

本研究は非人称構文が人間言語において果たす役割の重要性に着目し、その類型と機能のあり方を探求した。機能類型論的観点から、非人称構文を人称構文との相対的な連続性の中に位置づけ、その成否を決定する言語個別的ならびに普遍的パラメータの抽出を行った。とりわけドイツ語の「虚辞es」の出没を基軸に他のヨーロッパ諸語での在り方を明らかにするとともに、日本語との対応関係を探求した。

研究成果の概要（英文）：

The research aims to clarify the typology and functions of “impersonal constructions”. Assuming the continuum between impersonal and personal constructions, it is attempted to endeavor language specific/universal parameters determining the both respectively. Investigating the (non-)occurrence of the expletive “es” in German, related phenomena in some other European languages as well as in Japanese are tried to clarify.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・言語学

キーワード：非人称構文、類型、機能、ドイツ語学、日独対照

1. 研究開始当初の背景
 従来の非人称構文研究では通時的・共時

的を問わず、個別言語における観察・記述に重点が置かれてきた。ドイツ語に限

っても、その研究蓄積は多い。これに対して近年の言語類型論は、言語特徴のタイプ分けや同一あるいは類似の言語現象の単なる突き合わせに終わらず、機能的・認知的観点からカテゴリー・構造横断的に人間言語の普遍性・個別性を見極めようとしている。このような学術的背景において、研究代表者・研究分担者は一連の研究で格(case)・態(voice)・モダリティを中心とする文法カテゴリー・文法構造の通言語的に有効な特徴づけに努めてきた。その中にはいわゆる非人称構文が人間言語において果たす役割の重要性が含まれる。言語研究において、非人称構文は人称構文 (personal construction) に比べて周辺の・特異的と考えられてきた。

2. 研究の目的

この事情は、非人称構文が「論理的 (意味上の) 主語が文法的主語によって表わされていない」構文であるという理解に基づいている。その際、いわゆる虚辞 (expletive) が (それが実現されている場合だが) 文法的主語だとされる。一方ではしかし、虚辞と見なされるものも「意味」を担うと主張されている。例えば Bolinger (1977) は、英語の it が (通常の代名詞として以外に) 「状況 *ambience*」を表わすとしている。これはつまり、「状況」を論理的主語とする人称構文だという主張であり、非人称構文とみなす見解とは根本的な点で相容れない。このような核心的な議論に鑑みて、本研究は機能類型論 (functional-typological) 的観点から、非人称構文を人称構文から独立したものでなく、相対的な連続体の中に位置付け、その類型と機能を実証的・理論的に究明することを目指した。

3. 研究の方法

非人称構文の主な3つの表現タイプのうち、

研究代表者の小川暁夫が(1)天候述語・気候述語、研究分担者の田中慎が(2)心理表現・感覚表現、藤縄康弘が(3)非人称受動構文・非人称中間構文を担当した。また小川が非人称構文のパラメータ化、全体の総括を受け持った。平成 21 年度は、ドイツ語および通言語的に実証的データを収集・分析し、理論的な仮説に向けた予備考察を行った。平成 22 年度以降は、仮説を提示し、検証・精緻化を重ねた。非人称構文の成立を司るパラメータを抽出し、その相互作用の在り方を解明することによって、今後の機能類型論への実証的基礎研究を提示した。いずれの年度も三者間の緊密な連携の下、研究成果を国内外の学会で口頭発表し、また印刷物として随時発信することを目指した。

各表現タイプへの研究方法は具体的に以下のようにまとめられる。

(1)天候述語・気候述語：言語間・言語内で観察されるゼロ主語／虚辞主語／同族主語／意味的主語という対立 (連続性) の多様なデータを収集・分析した。合わせて、上記の対立 (連続性) の含意関係を検討した。

(2)心理表現・感覚表現：言語間・言語内での非人称・人称の相違を調査した。また (1) の表現タイプとの連続性 (対立) も看過できない。これら変異の在り方をデータから整理・分析した。さらに言語類型が異なる (例えば主語優先型言語 vs. 話題優先型言語) における対応表現にも考察を加えた。

(3)非人称受動構文・非人称中間構文：能動・受動・中動構文の交替メカニズムと非人称構文間の意味機能の相違を明らかにするとともに、諸言語での当該構文の有無、対応表現についても調査を行った。

4. 研究成果

本研究により次の点が明らかになった。

- a) 非人称構文においては虚辞の出没が重要な手掛かりである。
- b) 通言語的には、非人称態の言語間での存否や使用域の違いなどが解明された。こ

れら言語間の変異の調査は、次年度以降の理論的研究が目指すパラメータ導出とその相互作用の究明への予備的考察となった。

- c) 前年度までに行った理論的予備考察を踏まえ、非人称構文の成否を司る音韻的要因、形態的要因、統語的要因、意味的要因、語用論的要因を通言語的に有効なパラメータの候補として検討を重ねた。言語個別的あるいは普遍的パラメータを抽出し、それらの相互作用の在り方を含意的普遍性や関連性理論を踏まえて理論的仮説として提示した。
- d) 本研究の前提とされた仮説「非人称構文と人称構文の連続性」が実証的・具体的、また理論的に解明された。

研究成果は、日本国内においては日本独文学会、日本独文学会主催「語学ゼミナール」、阪神ドイツ文学会、京都ドイツ語学研究会など関係諸学会における共同でのシンポジウム、個別の研究発表とならんで、研究代表者・研究分担者がそれぞれ大学・研究所など各所で招待講演を行い、研究成果を報告してきた。また、海外での成果発表も活発に展開した。「第12回国際ゲルマニスト会議」(ワルシャワ大学)で小川が分科会議長を務める「ドイツ文法の記述」において三者が中間成果を発表したのを筆頭に、ベルリン・フンボルト大学、ミュンヘン大学、ハンブルク大学、ジェローナ・グラ大学(ポーランド)などでそれぞれが(複数回にわたって)研究発表を行った。これら口頭発表、またそれに伴う討議・意見交換による研究成果はすでに日本(日本独文学会叢書)、ドイツ(de Gruyter 出版、Stauffenburg 出版、iuducium 出版、Carl Winter 出版)、オランダ(John Benjamins 出版)などの言語学専門出版社から単著や論文の形で公刊に至っている。また、ドイツ(Peter Lang 出版、iudicium 出版)で近く公刊予定の論文も控えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計12件)

- (1) Andrej Malchukov & Akio Ogawa: Towards a typology of impersonal constructions – a semantic map approach, in: A. Malchukov & A. Siewierzka (eds.), *A typology of impersonal constructions*. Amsterdam: Benjamins, 2011, pp. 19-56. 査読有
- (2) Akio Ogawa: Zwei(fels)fälle: Doppelobjekte im Kasussyntagma, in: M. L. Kotin & E. G. Kotorova (eds.), *Geschichte und Typologie der Sprachsysteme*, Heidelberg: Winter, 2011, pp. 139-146. 査読有
- (3) Akio Ogawa & Andreas Rusterholz: Das Präfix *ver-*: eine Herausforderung für Deutschlernende, in: *Zielsprache Deutsch* 38-2, 2011, pp. 27-35. 査読有
- (4) Yasuhiro Fujinawa: Wo sich Synchronie und Diachronie überschneiden, in: M. L. Kotin & E. G. Kotorova (eds.), *Geschichte und Typologie der Sprachsysteme*, Heidelberg: Winter, 2011, pp. 129-138. 査読有
- (5) Akio Ogawa: Wie weit kann die Sprachwissenschaft interdisziplinär sein? in: A. Ogawa, K. Tamura, & D. Trauden (eds.), *Wie alles sich zum Ganzen webt. Festschrift für Yoshito Takahashi zum 65. Geburtstag*. Tübingen: Stauffenburg, 2010, pp 143-154. 査読有
- (6) 藤縄康弘: 「意味構造と項構造: 基本関数の認定とその複合をめぐって」, 成田節・藤縄康弘〔編〕『「文意味構造」の新展開: ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望』(= 日本独文学会研究叢書 073), 2010年, pp.4-24. 査読無
- (7) Yasuhiro Fujinawa & Shinako Imaizumi: Zwischen Possession und Involviertheit: Zur semantischen Basis der Valenzerweiterung im deutsch-japanischen Kontrast, in: *Neue Beiträge zur*

- Germanistik* 9-1, 2010, pp. 73-90. 査読有
- (8) Yasuhiro Fujinawa: Satzmodus jenseits von Haupt- und Nebensätzen: Über Verbzweitkomplement-sätze bei Wünschensverben im Deutschen, *Japanische Gesellschaft für Germanistik* (ed.): *Grammatik und sprachliches Handeln: Akten des 36. Linguisten-Seminars*, München: Iudicium, 2010 年, pp. 97-109, 査読有
- (9) 小川暁夫: 「コーパス (研究) が教えてくれるもの」 田中愼 [編] 『コーパスをめぐる—心理・知覚表現の分析』 (= 日本独文学会研究叢書 067 号), 2009, pp. 83-86. 査読無
- (10) Akio Ogawa: Das so genannte Expletivum in der Sekiguchi-Grammatik: Hinweise auf Sprachuniversalien, in: K. Ezawa, K. Sato, & H. Weydt (eds.), *Sekiguchi-Grammatik und die Linguistik von heute*, Tübingen: Stauffenburg, 2009, pp. 83-92. 査読有
- (11) 田中愼: 「Pro und contra Korpus: 心理表現の人称をめぐる」 田中愼 [編] 『コーパスをめぐる—心理・知覚表現の分析』 (= 日本独文学会研究叢書 067 号), 2009, pp. 31-40. 査読無
- (12) Akio Ogawa: (De-)Kausativierungsstrategien psychischer Prädikate unter besonderer Berücksichtigung des Deutschen und des Japanischen, in: C. Di Meola, et. al. (eds.): *Perspektiven Drei: Akten der 3. Tagung Deutsche Sprachwissenschaft in Italien, Rom, 14.-16. Februar 2008*, Frankfurt a.M., et. al.: Lang, 2009, pp. 117-127. 査読有

[学会発表] (計 19 件)

- (1) 藤縄康弘: 受動化とアスペクト性: ドイツ語の非人称受動を中心に, 国際日本研究センター 対照言語学部門 第 5 回研究会, 国内会議, 東京外国語大学国際日本研究センター対照言語学部門, 口頭 (一般), 東京外国語大学, 2011 年 12 月 17 日

- (2) Yasuhiro Fujinawa / Moe Nobukuni / Miho Takahashi: Unpersönliches Passiv und Aspektualität. 2011 年 12 月 2 日, ハンブルク大学, ドイツ
- (3) Akio Ogawa: Zur Typologie der Witterungs-*praedikate* – ein deutsch-japanischer Vergleich. 2011 年 12 月 1 日, ハンブルク大学, ドイツ
- (4) Shin Tanaka: Es gibt diesen Mann: (Un)persoenlichkeit und Diskursprominenz. 2011 年 12 月 1 日, ハンブルク大学, ドイツ
- (5) Akio Ogawa: Zur Referenzstrategien bei Impersonalia. 2011 年 8 月 17 日, ミュンヘン大学, ドイツ, 招待講演.
- (6) Shin Tanaka: „Deixis und Topik“. Deutsch-Japanische Sommerakademie. 2011 年 8 月 17 日, ミュンヘン大学, ドイツ, 招待講演.
- (7) Yasuhiro Fujinawa: Freie Wortstellung und Flexionskategorien: ein deutsch-japanischer Kontrast, 2011 年 8 月 17 日, ミュンヘン大学, ドイツ, 招待講演.
- (8) Shin Tanaka: „Deixis in der Grammatik“. Deutsch-Japanische Sommerakademie. 2011 年 8 月 5 日, ミュンヘン大学, ドイツ, 招待講演.
- (9) 田中愼: 「非デカルト派言語学? オルガノン・モデル (カール・ビューラー) と言語過程モデル (時枝誠記) の対照」 東京外国語大学多分野研究特別講演. 2011 年 1 月 24 日, 招待講演.
- (10) 小川暁夫: 「いわゆる虚辞の機能と類型について」 京都ドイツ語学研究会, シンポジウム. 2010 年 12 月 20 日, 京都大学
- (11) Shin Tanaka: „Sprachreflexion in Japan in Auseinandersetzung mit Europa: Das Organonmodell von Bühler und das Tokieda-Modell im Vergleich“. LIPP-Symposium „Sprachphilosophie und Universale Grammatik“ ミュンヘン大学, ドイツ, 2010 年 12 月 3 日, 招待講演.
- (12) Akio Ogawa: „Erforschung der Einzelsprache“ und „Allgemeine Grammatik“ bei von der Gabelentz –

Exemplifizierung anhand des Genitivobjekts im Deutschen und seiner Entsprechung im Japanischen. 2010年8月9日, ベルリン・フンボルト大学, ドイツ, 招待講演.

(13) Yasuhiro Fujinawa: Funktionale Äquivalenz und strukturelle Analyse: Zum Verhältnis zwischen Infinitivkonstruktionen mit *zu* und *dass*-Sätzen, 2010年8月6日, 国際ゲルマニスト会議, ワルシャワ大学, ポーランド

(14) Akio Ogawa: In Warschau wird *(es) im August bestimmt schön sein: Wie beschreibt man *es*? 2010年8月5日, 国際ゲルマニスト会議, ワルシャワ大学, ポーランド

(15) Shin Tanaka, Unsichtbares beschreiben: Konstruktion der „Unpersönlichkeit“ 2010年8月5日, 国際ゲルマニスト会議, ワルシャワ大学, ポーランド

(16) 今泉志奈子・藤縄康弘: 所有と関与のあいだ: ヴァレンス拡大の意味論的基盤についての日独対照, Morphology and Lexicon Forum (MLF) 2010, Morphology and Lexicon Forum (MLF), 2010年7月11日, 国立国語研究所

(17) Shin Tanaka: „Deixis und Anaphorik als Konzeptionalisierungsmuster“, 9. Internationale Tagung zur Funktionalen Pragmatik. ベルリン自由大学, ドイツ, 2009年11月6日. 招待講演.

(18) 藤縄康弘: 「文意味構造」の新展開—ドイツ語学への、そしてその先への今日的展望—, 日本独文学会 2009年 秋季研究発表会, 日本独文学会, シンポジウム, 名古屋市立大学, 2009年10月18日

(19) Yasuhiro Fujinawa: *Was wusste der Wackernagel schon alles!* Zur Verbstellung in den sog. Exklamativsätzen im Deutschen, 日本独文学会「第37回語学ゼミナール」, 京都セミナーハウス, 2009年8月26日

[図書] (計2件)

(1) Shin Tanaka: *Deixis und Anaphorik: Referenzstrategien in Text, Satz und Wort.* (= Linguistik – Impulse und Tendenzen 42). Berlin: de Gruyter, 2011, pp. 224.

(2) Akio Ogawa, K. Tamura, & D. Trauden (eds.), *Wie alles sich zum Ganzen webt. Festschrift für Yoshito Takahashi zum 65. Geburtstag.* Tübingen: Stauffenburg, 2010, pp. 252.

5. 研究組織

(1) 研究代表者

小川 暁夫 (OGAWA AKIO)
関西学院大学・文学部・教授
研究者番号: 00204066

(2) 研究分担者

田中 慎 (TANAKA SHIN)
千葉大学・言語教育センター・教授
研究者番号: 50236593

藤縄 康弘 (FUJINAWA YASUHIRO)
東京外国語大学・総合国際学研究院・
准教授
研究者番号: 60253291